

保育系短期大学生の地域交流活動
—幼児・小学生との英語あそびと外国人児童支援を通して—
Exchange Activities in the Community by Junior College Early
Childhood Education Majors:
Through English Language Activities with Children and Assistance
Activities for Foreign Schoolchildren

松 井 千 代*

MATSUI Chiyo

要 旨：

本稿は、2015年度後期から2016年度前期まで1年間、ゼミナールで実践してきた活動の中から、「子どもとの英語あそび」と「外国人支援活動団体でのボランティア」について、それぞれの活動を報告するものである。

子どもとの英語あそびは、幼児や小学1年生の発達段階を知ることができ、英語に触れる機会を子どもと共に作り、楽しむという経験ができた。また、外国人児童を託児する経験は、児童ばかりではなくその保護者にも必要とされることに気づき、その活動の意義を感じる体験をすることができた。

Abstract

This paper reports about exchange activities in the community by the students who belonged to the writer's seminar for a year, from the second semester in 2015 to the first one in 2016. Students joined "English Language Activities for Children" and "Assistance Activities for Foreign Schoolchildren."

Students could have opportunities to learn about children in each developmental stage and get opportunities to enjoy making lessons with children through English Activities. Also, students could realize the need not only for foreign schoolchildren but for their parents through the assistance activities.

キーワード：保育系短期大学生、多読、読解能力、動機づけ

Keyword : Junior College Early Childhood Education Majors, English Education for Children, Assistance Activities for Foreign Schoolchildren

I. ゼミナール概要

岡崎女子短期大学幼児教育学科では、「子どもの研究Ⅰ」「子どもの研究Ⅱ」の授業において、各担当教員の専門分野について学び、研究・実践を行っている。

松井千代ゼミナールでは、「子どもの英語」と「日本にすむ外国の子ども支援」の二本柱を基本とし、

「子どもの英語」では、英語の歌や遊び、英語絵本の読み聞かせの方法等を、「日本に住む外国の子ども支援」では、日本に住む外国にルーツを持つ子どもの存在とその現状、その支援の方法等を、それぞれ学ぶこととしている。そして、それらの知識を生かし、学生が自分たちで実践できることについて考えたり、その実践を地域で生かすことができないかを模索したりしている。

*岡崎女子短期大学幼児教育学科

本稿では、2015年度後期から2016年度前期までの1年間で実践してきた活動の中から、「子どもとの英語あそび」と「外国人支援活動団体でのボランティア」について、それぞれの活動を報告する。なお、本稿で扱う写真及び学生の言葉については、個人が特定できないよう配慮をしている。また、個人や団体が特定できるものに関しては、該当者及び団体から、掲載に関しての許可を得ていることを付記しておく。

Ⅱ. 活動報告

1. 子どもとの英語あそび

(1) 親と子どもの発達センター 親子遊び

本学併設の「親と子どもの発達センター」では、毎月ゼミ企画の講座を開講している。松井ゼミでは、2016年6月15日に初めての講座を開講し、学生が発表をした。学生は子どもたちを相手に、数を英語で数える歌と英語での手遊び、英語での色の言い方と虹を飛び越える運動遊び、手作りシールを使ったシール遊びを行った。



写真1 親子遊びの様子

子どもの年齢は幅広く、中には2歳児もいた。2歳児への対応は難しく、実践の途中で内容を変更することもあった。以下は、ゼミ学生の実践後の気づきである。

子どもがお母さんと一緒にいることで安心し、お母さんも積極的に参加してくれた。親子で遊べる企画が良いのだと思った。

(学生A)

子どもが好きな活動をもっと知ることと、お母さんへの声かけも必要だと感じました。

(学生B)

2歳より小さい子どももいて難しい。英語を知るとか教えるのではなく、歌やリズムの中で少しずつ楽しませると、子どもの中に英語が入っていくと思った。

(学生C)

将来保育者となる学生の、子どもへの様々な気づきが生まれるとともに、親子遊びのなかで保護者とも触れ合うこととなった、貴重な体験になったのではないかと考える。

(2) 岡崎市立根石小学校1年生との英語活動



写真2 英語活動の様子

小学校5・6年生の外国語活動が必修となったことを受け、岡崎市内の小学校では1年生にも学期に数回ずつ英語の授業を行っている。松井ゼミでは、2016年7月6日と13日に根石小学校を訪問し、1年生が英語に慣れ親しむための活動を行った。根石小学校の1年生は全部で4クラスであったため、2クラスずつ2週にわたって活動を行うこととした。

最初に色や動物の語彙を紹介し、“I like…”文を使ったカラー(アニマル)バスケットを行った。その後、学生が一人1冊ずつ英語の絵本を持ち、小学生のグループに読み聞かせをした。以下は、ゼミ学生の実践後の気づきである。

英語を習っている子が多くて驚きました。また、恥ずかしがっている子やうまく表現でき

ない子もいて、その子たちに寄り添い一緒に楽しむこともできました。(学生 D)

アニマルバスケットでは、小学生とすることで幼児よりも年齢が高いからか、わざと座ってくれないという対応の難しい子もいました。けれど、ある女の子が「これ楽しい」と言ってくれたように、楽しく英語を学ぶことにつながると思いました。(学生 E)

楽しすぎて椅子のまま転倒する子どもがいて、安全面には気を付けないといけないと思いました。注意点も含め、授業の段取りはとても大切。(学生 F)

英語絵本の読み聞かせは今回が初めてで緊張しました。でも、子供が表紙を見て「ゴリラがカギを持ってよ」などと言ってくれたので、理解していると思い安心しました。英語の絵本に対する子どもの反応はみな興味津々という感じでよかったです。(学生 G)

また、活動の補助をしてくださった各学級の担任の先生方からは、以下のようなコメントをいただいた。

楽しい英語のゲームや読み聞かせをありがとうございました。学生さんたちが子供に優しく対応してくれて、子供たちのキラキラした笑顔がたくさん見られ、楽しさいっぱい1時間でした。(担任 A)

活動に無駄がなく、楽しみながら自然と英語を身に着けることができた。発音練習はもう少しやれたかも。できる子だけでなく、できている感じの子もいたので。絵本の読み聞かせのグループ分けは人数偏りなくできる方法もあるので気を付けること。(担任 B)

子どもに対して大変優しく接して下さり、子どもたちもリラックスして活動ができた様子でした。さすがひっくり返って転んだ子がいたのですが、その後の様子をよく見てくれていたので助かりました。絵本の読み聞かせの時も、分かりにくいところは声かけをして

くれたので理解の助けになったと思います。(担任 C)

ゲーム、読み聞かせなど、子どもたちが大好きなものを英語と組み合わせたことで、すべての子どもが抵抗なく参加できた。子どもたちがとても喜んでいたので学期にせめて一度など定期的に行ってもらえるとよいと思った。(担任 D)

幼小連携の観点からも、保育者を目指す学生にとって、小学1年生を知ることは大きな意味があると考えます。小学1年生の反応を見ることで、どのような子どもを園で育てていくかについて考えるようになるからである。小学校の先生方のコメントからは、褒めていただいたことばかりではなく、課題となる点の指摘もあった。こういったフィードバックを生かすことで、学生の実践がより良いものになっていくと思われる。継続的に来てほしいという意見については、今後の地域貢献の方法を提案していただけたと受け取っている。

2. 外国人支援活動団体でのボランティア

本学のある三河地区は在住外国人の多い地域である。そして、その子どもが地域の保育園や幼稚園似通っており、その数は年々増加している。岡崎市には国際交流 NGO「Viva おかざき!!」という団体があり、様々な講座を在住の外国人、親子、子どもに対して開いている。そこで、本学の学生が保育に携わる者としてできることを考え、「Viva おかざき!!」の講座にボランティアとして参加した。

(1) 「外国人のためのマイナンバー説明会」託児ボランティア

2016年1月9日、岡崎市図書館交流プラザらにて、「Viva おかざき!!」が「外国人のためのマイナンバー説明会」を開催することとなった。岡崎市内および近隣地域に在住している6か国31名の外国人が参加することになったが、説明会は2時間行われる予定であったため、参加者の子どもの相手をする係が必要となった。その子どもたちの託児ボランティアとして、松井ゼミの学生が説明会に参加をした。



写真3 子どもたちと遊ぶ様子

当日、学生は、4歳から小学5年生までの、中国、フィリピン、ブラジルの子どもたちと一っしょに様々な遊びをした。説明会の終了後に、落ち着いたセミナーが聞くことができた子供たちの保護者から感謝の言葉をももらったことから、学生は自分たちの行った活動の意義を感じることができたようであった。

「Viva おかざき!!」の代表を務める長尾氏も、学生がボランティアに取り組む様子を、ブログを通して以下のように配信して下さった。

保育について勉強している学生さんということで、子どもたちもすぐに懐いて、対応もすごく上手でした!

託児ボランティアをしてもらえることで、参加している外国人の保護者が集中してセミナーに参加できるだけでなく、将来保育士さんとして活躍することを目指している若者自身が外国人やその子ども達と触れ合うことで、働く時に役に立つ経験になればと思っています。

外国にルーツを持つ子どもが益々増えている現代、保育士さんが様々なバックグラウンドを持つ保護者や子どもたちとどう関わっていくかは、現場で大きな課題になっています。実際、いい保育士さんに出会えると、小学校以降もスムーズに日本社会に入っていくことができるケースが多いように思います。

(もちろん、いろいろなケースはあると思いますが…) 地域で外国にルーツを持つ子どもたちに関心を持ってもらえる学生さんたちが

いることを、とても心強く思います。

今後も他のイベントでも岡短のみなさんと協働していけたらと考えていますので、楽しみに! (2016年1月26日「Viva おかざき!!」活動ブログ¹⁾より抜粋)

この活動に参加するにあたって、筆者と長尾氏は、学生たちに地域の外国人支援についてどのように伝えたらよいか、保育を学ぶ学生に何ができるかをずっと話し合ってきた。長尾氏のこのコメントを読み、筆者は学生を参加させてよかったと思うと共に、今後も学生を参加させる意義があると考えた。

(2) 親子絵画教室ボランティア

2016年1月30日、岡崎市図書館交流プラザリぶらにて開かれた「Viva おかざき!!」主催の親子絵画教室に、ボランティアとして学生が参加をした。この日の参加者は日本人親子ばかりであったが、学生は一人一人の子どもとしっかり触れ合うことができ、保育に関する貴重な経験をすることができたようであった。

参加した保護者の方から、「子どもをお姉さんに任せて自分が楽しめるなんて思ってなかったからうれしい!」という言葉ももらい、学生は喜んでいた。



写真4 子どもたちの世話をする様子

(3) 子ども日本語教室(夏休みクラス) ボランティア

「Viva おかざき!!」は、レギュラークラスとして子どもの日本語教室を開催している。子どもの夏季休業中に開催される日本語教室では、ボランティアの人たちが、子どもの夏休みの宿題を手伝っている。



写真5 いっしょに宿題に取り組む様子

2016年度の夏季休業中に開催された日本語教室に、学生がボランティアとして参加をした。

同じ小学生、同じ学年であっても、子どもによって日本語学習歴が様々である上に、ブラジル、中国、ペルーなど様々な背景を持つ子どもたちが10名以上集まっていた。学生は、夏休みの宿題に、子どもたちといっしょに取り組んだ。

この活動に参加をした学生は小学6年生の日系ブラジル人児童を担当した。流暢に日常会話のできるその子が、社会の宿題や国語の漢字問題に苦戦している姿を見て、学習言語の取得の難しさを理解したようであった。

Ⅲ. 学生の学びー「子どもの研究」レポートに書かれた学生のことばからー

1年間の授業の最後に、学生は活動のまとめとしてレポートを書いた。レポートには、それぞれの学びや気づきが、様々な側面から書き綴られていた。それらのまとめのレポートから、地域の子どもの英語による活動やあそび、在住外国人支援の場でのボランティアを通して得た学びが書かれていた部分や、学生が今後の自分に生かすための課題などが書かれていた部分を、抜粋して紹介したい。

今の自分の考えで以前と違っているのは、英語を伝えていく側として、どうやって英語に親しみをもってもらうかを意識して、方法を考えることができるようになったということです。私は小学生のときALTの先生がこわくて積極的に授業に参加していませんでした。それでもゲームが楽しかったことは覚え

ています。小学生や幼児は、英語を単に知るのではなく、英語を身近に感じることで親しみを持つことが、英語好きになるための土台作りだと思います。これからは、幼児期から英語に触れることが増える時代になり、ますます英語教育が進んでいくと思われませんが、子供の目線に立ち、「経験から身に付く」という意識を持って、関わっていったらと思います。
(学生H)

子どもに英語を教えるということを考えると、英語をたくさん知っていないといけないと思っていました。でも、日本語を教えるというボランティアの話を聞き、英語を媒介語として子どもと関わると、簡単な英語でも伝わるんだということや、伝えるためにはいろいろな方法があることを知ることができました。この授業を受ける前は、英語を自分のモノにしようと考えていたけれど、終わってみると、英語がうまくなるというよりも、子供に英語の楽しさを伝えるためにはどうしたらいいかいつも考えていました。なので、日本人の子どもに英語を教えたり、外国人の子どもに日本語を教えたりすることにとっても興味を持ちました。
(学生I)

この授業を受ける前は英語遊びや外国の子ども、または保護者とのかかわり方がまったくわかりませんでした。授業や発表、「Vivaおかざき!!」さんでのボランティアを通して考えを深めていくことができました。私は5月から6月の実習で、外国の子どもが7人いるクラスに入る機会をいただきました。人のかかわり方や食事のマナー、習慣など、私はその子たちに日本でのルールを押し付けがちでしたが、関わっていくうちに、この子たちは今まで私が住んでいたところとは違うところで、違う文化、風習の中で育っていたんだと気づくことができました。相手の文化や習慣を否定せずにこうするといいいよ、こんなやり方があるんだよと伝えていきたいと思いました。
(学生J)



写真 6 英語の手遊び歌の練習の様子

ざき!!」活動ブログ [http://vivaokazaki0.boo-log.com/d2016-01.html] (最終検索日: 2017年1月5日)

IV. まとめ 一関わりや交流の大切さ一

筆者は、本学に赴任した初年度にゼミナールを担当することとなり、自分の専門分野に関して、保育者になる学生にとって有意義な学びとは何かを常に模索し、自分の考えを学生に提示しながら、彼女たちの実践の手助けをしてきた。

筆者のゼミには、得意な英語をもっと学習したいという希望をもって選択をした学生、苦手意識はあるが英語の歌や手遊びに興味をもって選択をした学生などがいた。また、自分自身が外国にルーツを持つ学生も複数名いた。外国にルーツを持つ学生たちは身をもって言葉の大切さを知っているため、様々な活動に積極的に参加をし、時に筆者が助けをもらう場面も多くあった。

本実践報告をまとめる際、学生 I の述べている「英語を媒介語として子どもと関わると、簡単な英語でも伝わるんだということや、伝えるためにはいろいろな方法があることを知ることができました」という学びや、学生 H が実習を重ねる中で、日本のルールを押しつけるのではなく、相手の文化や習慣を否定しないようになったという学びを見ると、彼女たちの視野が広がり、彼女たちの中に新たな考えが芽生えたことが分かった。

今後も、地域の小学校や「Viva おかざき!!」のような団体と、「子どもとの英語あそび」での交流や「外国人支援活動団体でのボランティア」などで関わりを持ち、学生に、地域に貢献する経験を積みさせていくことは大切であろう。

引用文献

1) 岡崎市・国際交流・多文化共生「Viva おか